

●RI会長代理挨拶

21世紀の人間のニーズを満たすものとは

RI会長代理 今井 鎮雄

ご紹介いただきました、RI第2680地区、神戸西ロータリークラブの今井です。時間が限られておりますが、ジョナサン B. マジリアベ会長のメッセージをお伝えし、ロータリーの現況を報告することが、大事な役割とっております。

地区大会の冊子の挨拶文に書いておりますように、マジリアベ会長と私は、1980～81年度ガバナーで同期でした。先週行われたゾーン研究会では、マジリアベ会長ならびにロータリー財団管理委員長のジェームス L. レイシー元RI会長が、80～81年組でしたので、日本の同期のガバナーで、出席していた5人が一緒に写真を撮らせていただきました。80～81年度の同期の出席者がだんだん少なくなり、私たちも古参といわれるようになったのかなと思っております。

しかし、このたびは若い方々や先輩の佐藤パストガバナーとも一緒にこの2日間を過ごす機会をいただき、光栄に思っております。

ご存じのように、2005年2月23日は、ロータリークラブができて100周年です。私たちはこの100周年を念頭に置きながら、今年度のプログラム、そして来年度のプログラムをやっていくわけです。また、私たちはこの100年を振り返り、ロータリーが時代の中でどんな役割を果たしてきたかということをお考えなくてはならない節目を迎えていると思います。

限られた時間ですので、2つのことを申し上げます。一つは皆さん、国際大会あるいはこのような地区大会でしばしばお聞きになっているでしょうが、国際ロータリーは、来年までに会員を150万にしようとしてここ数年努力を続けてまいりました。残念ながらあまり増えておらず、まだ120万で低迷しています。もしも私たちが単にクラブの親睦



を図るだけなら、私たちの地域社会に貢献するだけなら、120万でも130万でも十分かもしれません。それぞれの地域で、それぞれの役割を果たせばよいのです。

では、150万にしようとして国際本部が言っている理由は何か。100年の昔、ロータリーは親睦団体であった。互いにクラブの中で仲良くしていこうと考え、生き馬の目を抜くような資本主義の競争社会の中で、時々自分を取り戻して、人間らしく生きようとし、友人を得ようとしてロータリークラブが生まれた。しかし、次に彼らは、自分たちの職業とは何だろうか考えた。100年前の熾烈な資本主義社会で、みんなが働いて儲けることをまず考えて生きた時代に、「一生懸命に働いて自分だけ儲かることが、果たしてロータリーの職業の本当の意味なんだろうか」という反省が生まれた。

ロータリーは1905年にできましたが、その少し前にマックス・ウェバーが『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』という本の中で、「一



人一人の人間に与えられている職業は天職なんだ。あなたは神から与えられたその職業を通してすべての人に奉仕しているんだ」と書きました。職業は私たちの天職である。自分の私腹を肥やすことが職業ではないということです。

あの時代、多くの人たちが自分の職業とは一体何だろうかと問いました。アーサー・シェルドンは、こう書いています。例えば、もし「靴をつくるのは面倒だし、儲けが少ないから、私は靴屋をやめよう」と言って、世界中の靴屋さんが靴をつくることをやめたらどうなるだろう。私たちは外に行くときに便利な靴を履くことができなくなる。靴屋さんは、靴づくりを通して儲けるのではなくて、多くの人が快適に歩けるように靴をつくっている。その意味において、靴屋さんは靴づくりを通して多くの人に奉仕をしているんだ。

そこから職業奉仕という概念が生まれ、私たちはそのことを大事にしてきました。しかし、時代が少しずつ変わり、殊に現代のようにこれだけ殺伐として人々が孤立化し、自殺を考えなければならない人が隣にいるかもしれない現代社会では、互いの心を開いて交わりあえる親睦のグループとしてのロータリーの意義はより重要ではないかと思えます。ロータリーはもう一度「親睦」を真剣に考えなければならない。そして同時にロータリーはもう一度「職業」を真剣に考えなければな

らない時代になっていると思えます。

それにもましてこの100年の間に変わったのは、「国際奉仕」がより広い意味で考えられるようになったことでしょう。世界の人たちとともに生きるために、私たちにはどんな役割があるのだろうかと考えるようになりました。ロータリーは、奉仕の業を通じて、世界の人たちが共に生きる社会を創ることを理想として掲げてきました。このことについて、一つ、二つ考えてみたいと思えます。

2002年10月に京都である国際会議が行われました。公共哲学というか、経済学、社会学など幾つかの学問の専門家が集まり、「資本主義は人類を幸福にしたか」ということについて研究会が開かれました。小さな会ですが、ここでは20世紀から21世紀が変わるときの一つの問題提起がなされました。

20世紀とは何か。資本主義の時代である。そして資本主義の経済は、6千年続く人類の文化の歴史からみれば一番物質的に豊かな繁栄をもたらしたといわれています。言い換えたら、20世紀に至るまで、チグリス・ユーフラテス文明とか、インダス文明、あるいは黄河文明といわれる時代から始まって、人類は自分の知恵で新しいものをつくり上げてきました。この6千年の中で、特にこの100年か150年、せいぜい200年の間の変化は著しく、人々を物質的に豊かにしたことは、ご存じの

とおりで。では、この豊かになった文化の中で、一人人間は幸福になったのだろうかというのが、この国際会議の一つのテーマでした。

いろいろなことが言われました。「少なくとも人間の欲望を満足させるという意味においては、相当の効果があつた」。たしかに毎日の暮らしの中で物質的な満足を得るという意味において、資本主義は人類に大きな効果を与えたのです。しかし、人類が本当に幸福になれたかという点もそうとはいえないのではないかと、というのが大方の結論だったようです。

一体それはどういうことなんだろうか。欲望を満たすために人間は科学技術を使って大きな発展をし、かなりの満足を得た。しかし、幸福に到達したのだろうか。幸福というのは、みんなが心地よく豊かに生きていくことを言います。「狭いながらも楽しいわが家」が幸福を象徴するとすれば、それは必ずしも御殿のようなところに住むことではない。お互いが信頼し、お互いが相手を楽しみ尊重しあつて生きていくことが幸福だと考えるならば、その点に関しては必ずしも資本主義や科学技術の発展は人類の幸福のために十分な効果を発揮しなかったのではないかと。

20世紀は戦争の時代とも言われ、国と国とが争った時代でした。しかしあのニューヨークの9・11同時多発テロのあと、国と国の戦争ではなく、テロとの戦いであると言われる。人類の幸福とは何かという問いをこの会議は私たちに投げかけています。では、21世紀において、私たちは幸福をどうしたら得られるのだろうか。

100年の歴史の中で、ロータリーは、決して物質的に豊かな社会をつくるために奉仕活動をしてきたわけではありません。むしろ、私たちは人類の幸福と平和を願い続けてきたのです。一昨年、国際問題研究のためのロータリーセンターをつくり、平和に対する研究ができる、そのことに献身してくれる若者を育てようという意図を積極的に変えてきたところに、大きな意味があると思います。ロータリーが21世紀に何を考えるかということは、ロータリー100周年を祝うときの大きな課題でありました。21世紀の人間のニーズを満たすと

はどういうことなんだろうか。

もう一つの例を申し上げます。それは、1998年故小淵総理が、ある会議の中で、「人間の安全保障」について国際社会で取り組もうと提案しました。そして、社会的に弱い立場にある人間、例えば女性や子どもや貧困層の人たちが安心して暮らせるよう保障するにはどうすればいいかと考えました。2000年の国連ミレニアム・サミットでは、当時の森総理が「人間の安全保障委員会」の設立を呼びかけました。国と国との紛争をはじめ、人間の存在を脅かしている諸々に対処するために私たちは深く反省し、そして人間が安全に、幸福に暮らせるようにみんなで知恵を出しあおうではないか。人間の安全が保障されるような世界をつくるのではないかと。実はそれこそがロータリーが一貫して望んできたものでした。

こうした考え方を具体化するために、国連は2001年、「人間の安全保障委員会」を発足させました。この委員会の共同議長になったのは、ロータリー財団奨学生の第2期生の緒方貞子さんと、もう一人はアマルティア・センというインド系イギリス人の経済学者です。アマルティア・セン教授は1998年、ノーベル経済学賞を受賞しました。セン教授は、新古典派の資本主義経済学者を、経済の論理については賢いかもしれないけれども、経済が豊かになることと人間が幸福になるということの接点を、あまり考えていないという点では賢い愚か者だと言っています。一部の人が物質的に豊かになり、欲しいものが手に入るような構造を、これまで人間の幸福だと考えていたが、そうではない。一人一人の人間がともに豊かになる世界をつくることこそ大事なのだとすることを学問的に考え、それによってノーベル経済学賞を受賞されたのです。経済倫理というものには経済学からは離れている。多くの経済学者はそう言うておりました。20世紀の終わりにほぼ時を同じくして現れたこの2つの現象は一体何を意味するのだろうか。効率だけを考えるのではなく、みんなと一緒に豊かになることを考えよう、みんなと一緒に生きることを安全を保障しよう、みんなが手を差し伸べて平和な世界をつくっていきましょうと



るとき、そこに私たちはロータリーの精神に重なるものを見出すことができるのです。

20世紀から21世紀へ移行するときに、人間の文明社会が行き詰まり、そして改めて人間の幸福について考えるようになった。それはロータリアンが世界の平和をどう考えるかということと結びついているのです。先ほどのお話にも、インドの方々がポリオプラスについて熱心に話し合っていると伺いました。私もポリオプラスの関係で2度インドへ行きました。ポリオ・サミットでは、日本から私だけが出たのですが、そのときパキスタンのロータリアンから、「私たちのところに届くワクチンの多くが日本から来ているので、感謝を申し上げたい」と言われました。

私は日本からどのようなものをお送りしたのかよくは存じません。けれど、世界の人たちのそのような集まりの中で、日本のロータリアンのいろいろな行為が感謝され、それがその人たちの中に広がっていくのを感じました。次にインドへはポリオワクチン投与のために1月に行きました。大勢の人たちがおり、また難民として流入してきている人がいるために、だれに投与したか、投与していないかがわかるように、投与した子供の爪にマジックインクでしるしをつける。1週間ほどの間にしるしが入っていない人たちには投与するというやり方でした。大変プリミティブな方法ですが、

人数が多いときには効率的だと伺いました。

今、日本では一般的にはほとんどポリオに罹る人はいない状況です。非常にうまくいっています。

世界が平和になるように、みんなが力を合わせて一緒にやろうとするときに、ロータリーがこれまで果たしてきた役割がこんなに多くあつたのかと気付きます。ロータリーを含む世界の平和を願うあらゆる人たちがグループが結集しなければならない現在、私たちは会員増強や財団への寄付が、新たな使命を帯びていると感じます。

私は皆さんとともにこの地区大会の中で多くのことを学ばせていただきたいと思います。ここはロータリーの先進地区です。皆さんは歴史の曲がり角にあつて、一人一人の力は小さいけれども、一つの集合体として平和という方向に向かって歴史を導いていらっしゃるのです。ぜひこれからも自信を持ってロータリー活動に献身していただければ幸いです。

今、時代の読めない状況の中で蔓延する危機感から人々を救うのは、ロータリーのような、他者に対して手を差し伸べようとする人々の存在です。マジアベ会長は“Lend a Hand”「手を貸そう」とおっしゃっています。手をお互いに差し伸べて世界を築こうというこのテーマの意味を、もう一度皆さんの心の中で思いを深くしていただければありがたいと思います。